

古文の新しい授業スタイルを目指して ～『狭衣物語』の伝本の読み比べ～

国語科教諭 岡田 広

1 はじめに

定期の人事異動により、平成27年4月1日に茨城県立中央高等学校に赴任した。令和元年度をもって、5年間という節目の年限を終えるに当たり、本校の研究紀要である『Metier』Vol.9への執筆の機会を得た。5年間の集大成と中央高校勤務6年目への飛躍を期し、ここに古典B（古文）の授業実践を書き留めておきたい。

なお、本稿は、平成30年10月9日の指導主事による学校訪問（国語）の際の公開授業と、令和元年10月29日に行われた、茨城県高等学校教育研究会国語部の公開授業で行った実践を踏まえた報告である。

2 異本を用いた伝本の読み比べの学習への挑戦

高等学校の古文学習においては、従来ほとんど触れられることはなかったが、古文作品には複数の異本・伝本が存在する。例えば『源氏物語』においてさえも、藤原定家による青表紙本系統の本文や、源光行と親行の親子による河内本系統の本文、そしてそれらとは別の別本系統の本文などが存在するのである。様々な伝本が存在すること、そして伝本間には本文異同があるという事実をほとんどの高校生は知らないまま古文の授業を終え、卒業してしまう。したがって、高校生が授業で古文作品における異本・伝本の存在を知ることが、画期的なことであり古文学習の大きな刺激となることが予想されるのである。

今回の授業実践は、従来の品詞分解や文法・現代語訳を中心とする授業とは大きく異なる。今までにはない授業実践である。同じタイトルの古文作品でありながら、異なる本文を持つ伝本の読み比べを通して古文の表現の豊かさや、物語世界の異なりを読み取ることを目標とする。

3 教材『狭衣物語』について－研究史を踏まえて－

『狭衣物語』は、平安時代後期に成立した物語であり、『源氏物語』の多大な影響を受けた作品である。作者は六条斎院宣旨などの諸説あるが、未詳である。鎌倉時代初期の物語評論の『無名草子』において、『源氏物語』に次ぐ作品として「源氏・狭衣」と並び称され高く評価されている。その『狭衣物語』には百本を超える異本・伝本が存在しており、その数の多さからも広く愛読されてきた物語であることがわかる。しかしながら『狭衣物語』は、国文学の研究史においては『源氏物語』に比べて極端に遅れている。その原因は、異本の数が多いことにある。そのため、従来の研究の多くは異本の整理に費やされてきた。そして、どの伝本を本物の正統な『狭衣物語』として読むべきかに固執してしまい、文学作品としてどのように評価すべきかという研究が十分には積み重ねられていない。このように『狭衣物語』研究で大きな障害とされてきた夥しい数の異本・伝本の存在があるのだが、正にこの夥しい数の異本・伝本の存在こそが『狭衣物語』の特色なのである。伝本間の激しい本文異同は、もはや書写の際に偶然に発生した単純なミスタイクを越えている。それは各伝本ごとに意図的に異なる物語世界を構築していると言っても過言ではあるまい。従って、各伝本の本文異同に着目し、読み深める研究こそが必要なのである。『狭衣物語』の伝本の読み比べを行うことは、蓋し、国文学と国語科教育を繋ぐ実践となるであろう。

4 今回の実践に対しての〈生徒観〉・〈教材観〉・〈指導観〉

〈生徒観〉

生徒は、現代語訳を作ることこそが古典を読むことだという誤解がある。そして、授業では本文の現代語訳を書き写すことに終始しがちである。表現に着目しながら本文を読み込むことで、古文の読みを深めていくことが課題である。

〈教材観〉

生徒は古文に対する興味や関心が極めて低い。古文の本文は難解でつまらないという思い込みがあるからであろう。『源氏物語』には三系統の伝本が存在する。さらに、平安後期の『狭衣物語』には、珍しい異本・伝本（三谷榮一博士の分類で三系統〈巻一のみ四系統〉の伝本）が存在することで有名である。伝本を読み比べることで、同じ物語でありながら異なるものの見方や考え方に触れることができる。

〈指導観〉

読み比べたことについて説明するためには、分かったことや考えたことをまとめることも必要となり、生徒の読みを深めることにつながると思う。

5 授業概要

対象クラス	3年1組（人文国際系クラス）
実施日	令和元年10月29日（茨城県高等学校教育研究会国語部 公開授業）
教科	古典B〈物語〉
教材	独自教材『狭衣物語』（今回の読み比べる伝本は、最も異同が大きい深川本〈西本願寺旧蔵本〉と流布本〈古活字本〉とした。）
目標	伝本ごとの物語の語り手の位置や、そのまなざしの異なりを読み取る。

※以下、実際に使用したワークシート（本文資料1～2と、四角囲みの読み比べポイント1～3）の一部抜粋をもとに論じていくこととする。

ワークシート【本文資料1】

『狭衣物語』冒頭（晩春の夕方、主人公の狭衣、思慕する源氏の宮を訪問する場面）

深川本『狭衣物語』（西本願寺旧蔵本）（新編日本古典文学全集『狭衣物語』① P17）

少年の春惜しめども留らぬものなりければ、三月も半ば過ぎぬ。御前の木立、何となく青みわたれる中に、中島の藤は、松にとのみ思ひ顔に咲きかかりて、山ほととぎす待ち顔なり。池の汀の八重山吹は、井手のわたりにやと見えたり。光源氏、身も投げつべし、とのたまひけんも、かくやなど、独り見たまふも飽かねば、侍童の小さきして、一房つつ折らせたまひて、源氏の宮の御方へ持て参りたまへれば、

流布本『狭衣物語』（古活字本）（新潮日本古典文学集成『狭衣物語』上 P9）

少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ、三月の二十日あまりにもなりぬ。御前の木立何となく青みわたりて木暗きなかに、中島の藤は、松にとのみ思はず咲きかかりて、山ほととぎす待ち顔なるに、池の水際の八重山吹は、井手のわたりにことならず見渡さるる夕映えのをかしさを、ひとり見たまふも飽かねば、侍童のをかしげなるして、一枝折らせたまひて、源氏の宮の御方に持て参りたまへれば、

文学史

『狭衣物語』（ ）時代後期の成立。かつて（ ）と並び称された傑作。

〈伝本の比較 どっちも『狭衣物語』だよ！〉

『源氏物語』の影響を、より強く受けていると考えられるのは、深川本と流布本のどちらの伝本か？本文を読み比べて、その根拠となる表現を示しながら自分の考えを書きなさい。

【本文資料1】は、『狭衣物語』の冒頭場面である。生徒は、同じ作品でありながら二つの伝本間に夥しい本文異同が生じていることに非常に驚く。ここではウォーミングアップとして、まず文学史を確認する。その上で深川本の独自本文である「光源氏、身も投げつべし」に注目できるように促す。『源氏物語』の主人公が「光源氏」であることは、すでに教科書の「桐壺」巻と「若紫」巻で学習しているからである。

ワークシート【本文資料2】

狭衣，野分を冒して飛鳥井女君（身分の低い姫君）のもとに通う場面

深川本『狭衣物語』（西本願寺旧蔵本）（新編日本古典文学全集『狭衣物語』① P121）

野分だちて、風いと荒らかに、窓打つ雨ももの恐ろしう聞こゆる宵の紛れに、①例の忍びておはしたり。②いつもなよなよとやつれなしたまへるに、いとど雨にさへいたうそぼちて、③隠れなき御匂ひばかりは、ところせきまでくゆり満ちたるを、隣々には、あやしがるものをかしかりけり。

「かやうの歩きは、習はざりつるを。人やりならぬわざかな」とて、濡れたる袖を解き散らして、隙なくうち重ねても、「心より外に、隔つる夜な夜なのわりなさを。さは思ひたまふや。かばかり人に心留むるものとも、まだこそ知らざりつれ」など語らひたまひて、

「あひ見ねば袖濡れまさる小夜衣一夜ばかりも隔てずもがな
かくわりなき心焦られは、いつ習ひにけるぞとよ」などのたまへば、
いつまでか袖干しわびん小夜衣隔て多かる中と見ゆると
またある本に、
夜な夜なを隔て果てては小夜衣身さへうきにやならんとすらん
と言ふ。ものはかなげなり。

流布本『狭衣物語』（古活字本）（新潮日本古典文学集成『狭衣物語』上 P95）

野分だちて風の音あららかに、窓打つ雨ももの恐ろしう聞こゆる宵の紛れに、①例のいと忍びて紛れ入りたまへり。②いつもなえなえとやつれなしたまへるに、雨にさへいたうそぼちて、③にほひばかりはいとところせきまでくゆりみちたるを、となりの山がつどももあやしがりけり。

「かやうの有様は、まだならはざりつるを。人やりならぬわざかな」とて、濡れたる御衣解きちらして、「ひまなくうち重ねても、心よりほかに隔つる夜な夜なのわりなきを、さは思ひたまふや。かばかり人に心とむるものところ、ならはざりつれ」など、尽きせず語らひたまひて、

「あひ見ては袖濡れそむるさ夜衣一夜ばかりも隔てずもがな
わりなき心焦られなどは、いつならひけるぞとよ」とのたまへば、
隔つれば袖ほしわぶるさ夜衣つひには身さへ朽ちや果てなむ
と言ふものはかなげなり。

〈読み比べのポイント 1〉言語感覚を磨き、分析的な読みをしよう。

深川本「①例の忍びておはしたり。」

〈対比〉

流布本「①例のいと忍びて紛れ入りたまへり。」

本文の表現の違いに着目し、場面の描写の違いを考察しよう。

〈ヒント〉「語り手」は、この場面ではどこにいるの？

※まず現代語訳してみよう！

深川本①「忍びておはしたり。」→（現代語訳）

流布本①「忍びて紛れ入りたまへり。」→（現代語訳）

〈考察1〉

深川本の 語り手の位置 →（ ）

流布本の 語り手の位置 →（ ）

【本文資料2】のこの場面も二つの伝本間に夥しい本文異同が生じている箇所である。すぐに気付くことは、深川本の和歌が三首であるのに対して、流布本の和歌は二首となっている点である。今回はあまりに専門的になるので考察の対象にはしなかったが、本文だけではなく和歌の表現や和歌の数にまで本文異同が生じていることに生徒が気付くことが重要であり意義のあることと考えた。これこそが教科書の学習だけでは絶対に見る〈知る〉ことのできない古典作品の真の姿だからである。

さて、伝本間の傍線部①の本文異同は、物語世界にどのような異なりを生じさせているのだろうか。ここでは、物語の「語り手の位置」の違いを生徒が読み取ることを目標とした。この段階からグループワークによる、いわゆる「アクティブラーニング」（AL型授業）を取り入れて授業を展開した。

深川本①「忍びておはしたり。」を現代語訳すると「(狭衣大将は) 忍んでいらっしやった。」となり、流布本①「忍びて紛れ入りたまへり。」を現代語訳すると「(狭衣大将は) 忍んで(宵に) 紛れて入りなさった。」となる。短文なので生徒にとって、現代語訳することはさほど難しくはない。この本文異同がもたらす微妙なニュアンスの違いについて、どのような解釈〈読み〉が可能かを考察することを目標とした。生徒たちはグループワークで様々な意見を出し合い、大いに盛り上がりを見せていた。ここでの、生徒が読み取るべきことを簡略化して示すと次のようになる。

深川本の 語り手の位置→（ 飛鳥井女君の家の中 すなわち〈飛鳥井女君の側〉 ）

流布本の 語り手の位置→（ 飛鳥井女君の家の外 すなわち〈狭衣の側〉 ）

深川本の語り手は、狭衣に訪問される側の飛鳥井女君に寄り添っており、流布本の語り手は、訪問する側の狭衣に寄り添っているという、視点の違いである。

〈読み比べのポイント 2〉

深川本②「いつもなよなよとやつれなしたまへるに」と、流布本②「いつもなえなえとやつれなしたまへるに」の本文異同に着目して、狭衣の人物像を考察しよう！

〈ヒント〉「語り手」は、狭衣の何を（どこを）見ているの？

深川本②「なよなよと」→（ ）
〈対比〉

流布本②「なえなえと」→（ ）

深川本②「なよなよと」・流布本②「なえなえと」の本文異同に着目する。深川本の「なよなよ」は、人物の性格を表す表現と解することができる。流布本に見られる「なえなえ」は、衣類の着慣れて糊気なくなり柔らかな様子を示していると考えられる。よって、深川本②「なよなよと」は、狭衣の人物（性格）といった内面を描写しており、対する流布本②「なえなえと」は狭衣の服装（衣服）といった外面を描写していると解釈できる。

深川本が描く狭衣の人物像は、性格はいつもなよなよとしているが、隠れようもない輝くような美しさであるのに対して、流布本が描く狭衣の人物像は、服装は、いつもなえなえとしているが輝くような美しさがあるとしているのである。すなわち、二つの伝本間の本文異同は、主人公狭衣の人物造型の違いに及んでいることがわかるのである。

〈読み比べのポイント 3〉

深川本③「隣々には、あやしがるもをかしかりけり。」

流布本③「隣の山がつどももあやしがりけり。」

狭衣が訪問した時の飛鳥井女君の隣家の様子である。本文の表現の違いに着目し、物語の語り手のまなざしの違いを考察しよう！また、〈読み比べのポイント1〉で考察した語り手の位置とつなげてみよう！

※まず、流布本の「山がつ」の意味を調べよう。

「山がつ」の意味→（ ）
〈考察2〉

深川本の語り手のまなざし→（ ）
〈対比〉

流布本の語り手のまなざし→（ ）

深川本③と流布本③の本文異同は、何を示しているのでしょうか。また、〈読み比べのポイント 1〉との繋がりを考えたときどのような解釈〈読み〉が可能となるのか、ここでは考察を通して物語の「語り手の位置」の違いを生徒が読み取ること为目标とした。

まず始めに、流布本にはあって深川本には無い「山がつ」という表現に注目する。「山がつ」とは、「山里に住む身分の低い者」の意である。流布本では、あえて「山がつ」という表現を使用して、飛鳥井女君の屋敷の周辺がいかに下層階級であるかを強調している。あるいは、飛鳥井女君の身分の低さを際立たせていると解することもできる。しかも、「山がつどももあやしがりけり。」という表現は、やはりどこか辛辣である。流布本の語り手の、身分の低い者への冷ややかなまなざしを感じる本文である。それに対して、深川本の「隣々には、あやしがるもをかしかりけり。」の本文は、語り手による、飛鳥井女君やその周囲への好意的な印象が語られ、流布本のような身分の低い者への冷ややかなまなざしは感じ取れない。

ここで〈読み比べのポイント 1〉に立ち返ると、深川本の語り手は、飛鳥井女君に寄り添っており、流布本の語り手は、狭衣に寄り添っていたのである。翻って考えると、深川本の語り手は、飛鳥井女君という身分の低い女君の側に寄り添う語りであり、対する流布本の語り手は、狭衣という高貴な身分の男性貴族の側からの語りとなっており、尚且つ身分の低い者への冷ややかなまなざしも感じられる本文となっているのである。二つの伝本を読み比べたとき、こういった解釈〈読み〉は十分に可能であろう。

6 まとめ

今回の公開授業では、グループ学習によるAL型授業を取り入れて展開した。最も盛り上がったのは、〈読み比べのポイント 1〉の場面である。グループ内の活発な意見交換や、他のグループとの交流を通して、生徒は読みを深めることができていたと思う。また、私の意図していた解釈と生徒の導き出した解釈が一致したことは、授業者の教員と生徒が『狭衣物語』という一つの古典作品を共有できた瞬間であったと思う。一方で、〈読み比べのポイント 2・3〉に関しては、時間的な制約もあり私の方で主導して授業を展開した形となった。

7 今回の実践の主旨と授業改善の視点及び課題

現代語訳の作成ではなく、伝本の読み比べを通して「本文の読み」を深めることが、今回の授業の主旨と授業改善の視点である。また、古文には数種類の異本・伝本が存在することを生徒が知る機会となり、古文への興味関心を喚起させることも意図している。

今後、伝本の読み比べの授業を行う場合の課題としては以下の点があげられる。

- ・授業で使用する異本や伝本の用意。
- ・生徒自身による伝本間の本文異同の発見と分析と考察。

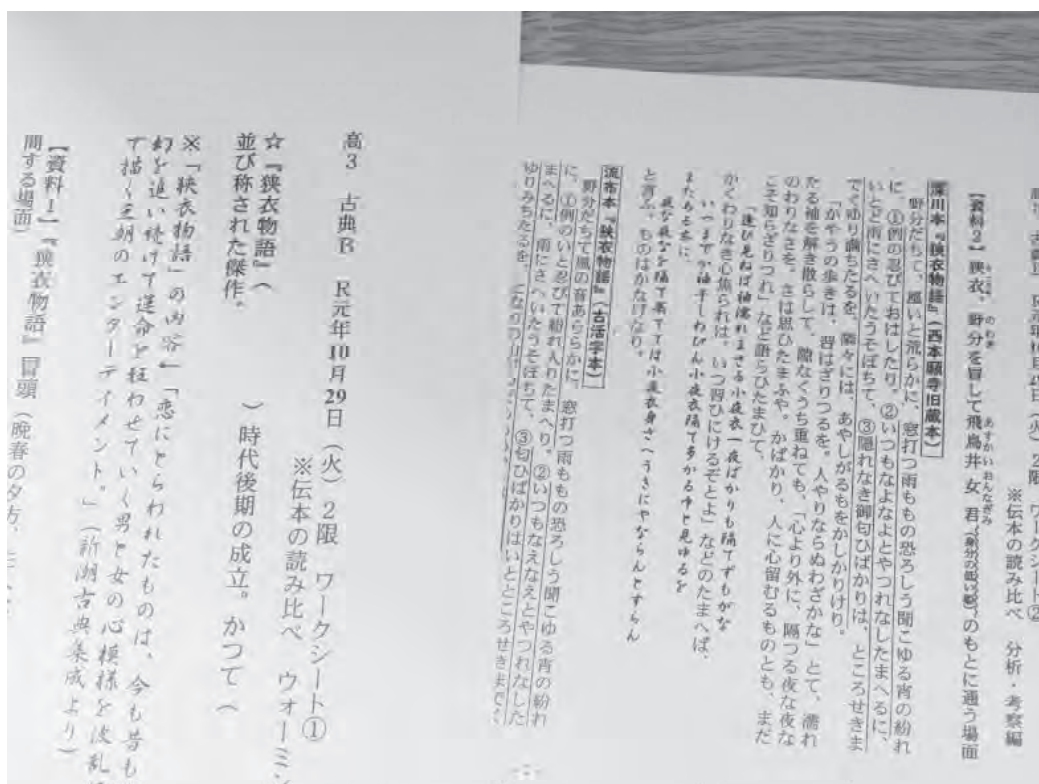
8 追記と今後の目標

今回の教育実践の内容は、私が國學院大學大学院（博士課程前期・後期）在学中の『狭衣物語』研究の一端によるものである。今後の目標は、国文学と国語科教育を融合させた新領域の研究で、いつの日か博士号（文学・教育学）を取得することである。今回の論文は、その第一歩を踏み出した記念すべき出発点として位置づけたい。そして、これからも県立高校の一教員として、真摯なクラス経営と、教材研究・授業の研鑽、剣道部の指導に励んでいきたい。

授業風景



ワークシート



9 これまでの研究業績・その他

- ・修士論文『狭衣物語の表現研究』（修士〈文学〉・國學院大學）
- ・研究論文『『狭衣物語』論—今姫君と飛鳥井姫君の物語を中心に—』（國學院大學國文學會『日本文學論究』第64冊／平成17年3月刊）→後に、優秀論文として学術文献刊行会『国文学年次別論文集 中古3』（平成19年7月刊）に収録される。
- ・著書（共著）狭衣物語研究会編『狭衣物語全註釈 II 卷一（下）』（おうふう社／平成19年10月刊）
- ・学会発表『『狭衣物語』論—今姫君と飛鳥井姫君をめぐる—』（國學院大學國文學會／平成16年1月10日）
- ・公開授業 真壁高等学校（平成25年度茨城県高等学校教育研究会国語部）平成25年10月22日
- ・公開授業 中央高等学校（令和元年度茨城県高等学校教育研究会国語部）令和元年10月29日